
シロフェイ

Mr・Y

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シロフェイ

【Nコード】

N8967G

【作者名】

Mr・Y

【あらすじ】

正義の味方を目指し続けた青年、衛宮士郎は、死にかけていたが、遠坂凜が彼の前に現れ、士郎を並行世界に転送した、そして士郎は、9歳の体となり、フェイトのいる海鳴市にやってきた・・・こうして物語は進み出した・・・

プロローグ(前書き)

どもども Mr・Y です、漢字などに間違いが、あれば遠慮なく教えてください！これは、ほとんど設定は、無視しています、それでも良い方は、どうぞ！

プロローグ

プロローグ

ある時戦争がおきた・・・その名は、聖杯戦争

7人のマスターと、サーヴァントが二人一組になり最後の1組になるまで続く戦争だ。

第5次の優勝者は、衛宮士郎とセイバーだった二人は聖杯は使わなかったなぜなら、その場で破壊したからだ。

「シロウ、貴方を愛しています。」と、セイバーが言い残し、セイバーと別れた・・・
それから数年後・・・

士郎は、死にかけていた。理由は、ただ一つ救った人間に刺されたからだ！

しかし、士郎は・・・

「これで良いんだ・・・俺が死ぬことで、人々が幸せになるのなら、それで良い・・・」と、つぶやいた・・・その時、

「良いわけないじゃない！この、バカ！」という声が聞こえた・・・
士郎は声が聞こえた方をみると・・・

「遠・・・坂!?!」

あの戦争で、アーチャーのマスターで自分と同盟を組んだ女性、遠坂凜の姿が、そこにあった・・・

「かつてに死ぬのは、許さないって言ったでしょ!」「すまない・・・で、なんのようだ、遠坂?」

とりあえず謝り、用事を聞いた、まあ、予想は、出来ているが・・・

「貴方に、封印指定が、でたから、貴方を殺しに来たわ、まあ、戸籍上にだけど・・・」「やっぱりか・・・て、戸籍上?」

かなり気になる一言だった・・・「貴方を平行世界に、とばすのよ・・・まあ、こことあまりかわらないから、大丈夫だろうけど・・・」
「でも俺は、先長くないぞ・・・」
「当たり前だった、もう死亡する寸前なのだから・・・」
「大丈夫！青崎製の人形に精神など入れるから。」
「そうか・・・」
「まあ、そんなことより・・・いくわよ」
「ああ・・・」
そして、遠坂は、俺をとばす前に・・・
「向こうで、幸せになりなさいよ、士郎」
「ああ・・・努力するよ・・・」

そして俺は、平行世界に旅だった・・・

続く

第1話 フェイト・テストロッサ・ハラウン（前書き）

どうも Mr・Y です。俺は、英語と漢字が苦手なのです。だからデバイスの言葉は、カタカナで士郎のブレイドワークスとトリス・オン以外は、カタカナです。本当に、苦手ですいません。

第1話 フェイト・テストロッサ・ハラウン

第1話 フェイト・T・ハラウン

「な・・・なんでさ・・・」

士郎がきずいた時には、上空100メートルトレース・オン「く・・・強化開始」

士郎が落ちるに強化し、落下の衝撃をやらわげた。

士郎が、落下した場所は、林の木上だった・・・

「なんでこんな所に、落ちるんだよ、遠坂・・・」

士郎は、傷が回復するまで動けなかった・・・

私は、思うあの時私が、もっと速く来ていれば

「なのは」は、傷つかなかっただろうと・・・

「フェイト」いいかげん戻ってよ」

「うん・・・でもアルフ、私が遅かったから・・・」

「フェイトのせいじゃないよ、あたかも遅かったし」

と二人の女性は、悩んでいた・・・

「だから私は、強くなるって決めただ、なのはを守るために・・・

」

「フェイト・・・よし、あたかも強くなる、そしてフェイトを助ける」なんだかねで悩み事は、直ぐになくなった二人だった・・・

その時・・・

ガサ・・・

「誰だ!!」

とりあえず、全て遠き料金アウトローンで回復したが・・・

「ここは何処だ・・・ん？あれは、人？」

士郎が近づこうと、した時二人の声が、聞こえた。

「だから私強くなるって決めたんだ・・・なのは守れるように・・・」

「フェイト・・・よしあたいも強くなってフェイトを助けるよ」

(あの二人、魔力が、あるみたいだ・・・まさか、魔術師か?)

ガサ・・・

(しまった!)

「誰だ!!」

(しょうがない・・・出るか・・・)

士郎は、おとなしく二人の前に姿をあらわした。

「貴方は、誰ですか？まさか、魔導師か？」

そう言っつてフェイトは、自分の武器を構える。

「まあ、待て俺は君達の敵じゃない。」

「ならば、名前を教えてください」

「衛宮士郎だ、士郎でかまわない、で？君達は？」

「アルフだ。」

「フェイト・テストロツサ・ハラオウン、フェイトと呼んでください、もう一度聞きます、貴方は、魔導師ですか？」

「いや俺は、魔導師じゃなくて、魔術師さ。」

とりあえず魔術師と言って見たけど、解るだろうかと士郎は、思ったが……

「魔術師？よく解りませんが、とりあえず魔力を使うのですね？」

「ああ、まあ魔導師でもかまわんが、とりあえず敬語は、やめてくれ、歳もあまりかわらないだろう。」

（まあ、本当は2・3倍ぐらい違うけど……）

「そうだね、ところで士郎は、ここで何を？」

普通に聞かれたくないことを聞かれた、どうしようとして士郎は、考えた、そして……

「散歩だ、フェイト達は？なぜだか知らないが、

「強くなりたい」と言っていたが？」

「あ……」

「？言えないのなら別にいいが……」

「実は……と言う理由で……」

「なるほど、なら俺もフェイト達と協力しよう」

「へっ！？とりあえず、ありがとう」

「いいのかい？あたし達初対面だろ？」

まあ、普通はそうだろう、しかし士郎は、違った。

「困っている人を助けられないわけにはいかないのにな・・・」

「じゃあ、初めてだし・・・一回私と模擬戦してくれないかな・・・」

フェイトは、そう言っつて、自分の武器を構える。

「別にかまわんが、なんでだ？」

士郎は、フェイトに質問した・・・

「実力を知りたいから」

「いるだろうしかし、後悔するなよ・・・」

「行くよ、バルディッシュュ！！」

「いくぞ、投影開始（トレース・オン）」

士郎は、使い慣れた、双剣干涉・莫大を投影し、フェイトの武器をおもいつきり叩きつけ、武器を落として、フェイトの前に莫大を突き付けてこっつぶやいた・・・

「俺の勝ちだ、フェイト……」

続く

第2話 高町なのは(前書き)

どうもMr・Yです。今回やっとなのはの登場です。まあ、今週は、テストなので更新が遅くなります。テストが、済んだら急いで、次回を書こうと思いますでは、シロフェイ第2話を楽しんでください。

第2話 高町なのは

第2話 高町なのは

「俺の、勝ちだ」

「そんな、まさか・・・フェイトが、たった30秒ぐらいで負けるなんて・・・」
「つい本気で戦って土郎はと、いうと・・・」

「この程度で、人を守るなんてな・・・まだまだだな・・・」

と、言ったその時・・・

「やっぱり私は、弱すぎるのかな？」

とフェイトは、つぶやいた・・・

「そんなことないよ」土郎が、強すぎるだけだよ」

アルフは精一杯説得したが、フェイトは、黙ってしまった・・・

(やばいな・・・言いすぎたかな?)

と士郎は思っていたら、フェイトが、口をひらいた。

「士郎・・・私は・・・もっと強くなりたい・・・」

フェイトは、強くなりたい気持ちを、士郎に言う・・・

「どうするんだ？というより、どうやって強くなるのだ？」

士郎は、そんな質問したらフェイトは、こう応えた。

「士郎・・・私に力を貸して・・・」

それで士郎は・・・

「協力するのでは、言ったが？」

「そう言う意味じゃなくて私に戦い方を・・・」

「教えてほしいのか？」

フェイトは、驚いたが、まあしょうがない・・・

「うん・・・私はもう

「なのは」を傷つけたくないから、強くなりたいんです・・・」

（フェイト・・・お前の理想は、なんだか、俺の理想と似ているな・・・）

士郎は、そう思いフェイトにこう、言った。

「そうか・・・ならこの俺でよければ、フェイトに戦い方を教えよう、よろしくな、フェイト」

「うん・・・私は、そろそろ

「なのは」の所と自宅に戻るから・・・じゃあね士郎、また明日・・・」

「そうか・・・じゃあまた明日・・・」

そうやって俺は、林の中に入り、フェイトは、なのはの所と自宅に向かった・・・

～林の中～

「さてどこで寝るかが、問題だな・・・ん？あの木の下でいいか・・・もう疲れたからな、寝ればどこでもいいか・・・」

と、士郎が間抜けなことを言っている同じころ、フェイトはというと・・・

「ねえ、アルフ・・・なんで私は、士郎にフェイトって呼んでほしかったのかな？」

「さあ〜（それって、恋だつて言えないよな・・・）」

「まあ、とりあえずなのは所に行こうか・・・」

そして、時空管理局の一室

コンコン

「どじどじ〜」

ガチャ・・・

「あ、なのはきずいたんだ・・・」

「うん、ありがとうフェイトちゃん・・・あの時助けてくれて・・・」

「でも結局は、なのはをこんなことに・・・」

「それでも、フェイトちゃんのせいじゃないよ・・・私の不注意でもあったし・・・」

「でも・・・」

「知ってるでしょ、私は丈夫だって・・・」

「でも、私はなのはを守る！たとえなのはが、丈夫で強くても私が、なのはを守る！」

「フェイトちゃん・・・」

「だから私は、強くなる！今日だって、さっきまで、特訓してたんだ。」

「なら、私はフェイトちゃんを守るよ！私だけ守られているのは嫌だ！だからフェイトちゃん！」

「な・・・何なのは？」

「明日から、フェイトちゃんと一緒に特訓していいかな？」

「いいと思うけど・・・」

「？フェイトちゃん、なんで

「思うけど・・・」なの？」

「とある人とやってるからだよ」

「ふん、じゃあその人に連絡して、OKもらおうよー！」

「うん」

フェイトは、士郎に念話をしようとしたが・・・

「あれ？つながらない・・・」

「な、なんで？」

士郎につなげることができなかった、なぜなら今士郎は・・・

「・・・」

木の下で、寝ているから・・・

「そういえば、士郎は、どこに住んでいるだろう？」

「士郎？私のお父さんのこと？」

「いや、衛宮士郎といってね、私達と協力してくれる人だよ」

「士郎君は、一体何者なの？」

「さあ、私は、一度模擬戦してみたけど、30秒ぐらいしかもたなかつたし・・・」

「士郎君って強いんだね・・・私も頼んでみようかな・・・」

「うーん、士郎は、住んでいる場所が不明な人だよ。」

と、フェイトは、言ってみたらなのは・・・

「明日、やるの？やるのだったらその時に・・・」

「わかった、その時に頼んでみるね！」

その話が済んだ、その頃士郎は・・・

「・・・まあ、けっこう寝れたな・・・」

かなり長い睡眠から、起きたその時・・・

「貴方、魔力があるわね？・・・まさか魔導師？」

続く

第3話 ようこそ ハラオウン家へ！ Part 1（前書き）

ども Mr・Yです。多少遅くなりましたができました。では、第3話を楽しんでください。質問は、メッセージに書いて送ってください。

第3話 ようこそ ハラオウン家へ！ Part 1

第3話 ようこそ、ハラオウン家へ！Part 1

「貴方魔力があるみたい・・・まさか魔導師？」

「違う俺は魔術師だ・・・まあ魔力を使うが・・・ところで、貴方は、だれだ？」

「私は、リンディ・ハラオウンといい、時空管理局の提督です。」

「俺は衛宮士郎だ、士郎で・・・ん？ハラオウン？さっきいた少女もハラオウンと、名乗っていたが・・・」

「その娘の母です」

「そうか・・・」

「ところで士郎君は、どこに住んでいるのかな？まさかこことは、言わないよね？」

「・・・」

「図星だったまさか、いつぱいで聞かれるとは、思ってもいなかった・・・」

「まさか本当にここに住んでるの？」

「いや・・・帰る家がないだけだ・・・」

士郎は、おとなしく、そう応えた・・・それを聞いたリンディは、

士郎にこう言った。

「なら私の家にいそろうつしない？ちょうどフェイトも貴方と同じぐらいの歳なのよ……」

「他人に迷惑をかけたくないのでいやです……」

「でも、ここで住んでいる方が迷惑よ。」

「ぐ……貴方の家族の人に迷惑が……」

「それなら問題ないわ。」

「なに？なせだ！」

「みんな貴方みたいな人をほっとけない人達だからよ……」

「くっ……」

士郎は、（この人には、勝てないな……）と思っていた時リンデイがこう言った……

「人に迷惑をかけたくなければ私の家に、いそろうつなさい！貴方の

「幸せ」のためよ！！」

（「幸せ」？……そういえば遠坂が、

「幸せになりなさい」と言っていたな……しょうがない……リンデイさんの家におじやまするしかないか……）

「わかりました……貴方の家におじやまします……」

「ならいいわ……ついてきて……」

そして、士郎はリンディにつれられてフェイトの家つまり、高町家の近くのアパートにやってきた……

「だだいま〜」「おかえり、母さん」

「艦長、おかえりなさい……」

「ただいま、クロノ、エイミィ！」

「おや？母さん後ろにいる少年は？いつたい……」

「あつ林の中で保護したのほら自己紹介して……」
「リンディがそう言つと士郎は……」

「衛宮士郎だ！士郎でかまわない……」

「クロノ・ハラオウンだ、よろしく」

「エイミィだよ〜よろしくね！士郎君」

とりあえず自己紹介がすんだ後に、リンディがこう言った……

「今日から士郎君はここでくらすことになりました〜」

「「なっなに〜!!」「」」

まあ普通は、こうだよな……と士郎は思っていたが……

「まっまさかフェイトの他に養子をとるなんて……」

「びつくりしたよ」

「びつくりするのは、そこかよ!」

「もちろん!」

「もしかして、なれてるのか?」

「いやもつと非常識な物を知っているからさ・・・」
「なるほど・・・」

「聞くけど、士郎君は、魔導師?時空管理局の関係者じゃないのはわかるけど・・・」

本日3回目質問だいいかげん面倒だが・・・

「いや俺は魔術師だ、それと時空管理局とは、なんだ?」

「時空管理局とはね、さまざまな、時空を管理するときには、守ったり、人命救助したりしている所よ・・・」

「聞くけど・・・そこには

「封印指定」はないのか?」

「「封印指定」?なんだ?それは?」

「いや・・・忘れてくれ・・・」

「まあ、いいか・・・後で詳しく聞くからな!」

「・・・できれば断りたいんだが・・・」

「だめだ！」

「時がきたら話す・・・それじゃあ、だめなのか？」

「まあ・・・いいか・・・」

「ところで、クロノ」

「なんだ？」

「フェイトから聞いたんだが、とある少女がなんらかの理由で傷ついたとはなんのことだ？協力するから、教えてくれ。」

「本当に、協力してくれんだな？」

「ああ・・・」

「そうか・・・なら話そう・・・実はな・・・」

続

第4話 ようこそ！ハラオウン家へ！Part 2（前書き）

どうもMr・Yです。一週間に一話です、遅いかも知れませんが、楽しんでください・・・ でわ第4話を楽しんでください！

第4話 ようこそ！ハラウン家へ！Part 2

第4話 ようこそ！ハラウン家へ！Part 2

「実はな・・・」

そう言つてクロノは黙ってしまった・・・

「？なぜだまる？」

「いやいなから話す」

「なんだ？いつたい？」

「今、魔導師の魔力の源

「リンカーコア」が奪い取れるという事件が起きているだ」

「じゃあ

「なのは」という少女もその被害者か？」

「ああ・・・そうだ・・・まだ若いから3日で治ったんだがな・・・」

「その時のフェイトちゃんはかなり落ち込んでたんだよ・・・」

「朝もそんなかんじで悩んでいたがそれが原因か」

士郎は理由を聞いただけで、落ち込んでる原因は知らなかった・・・

「なぜお前が朝にフェイトにあっているんだ？なら昼過ぎには、お前をここにつれてくるはずだ！」

「フェイトには、どこに住んでいるかは、言ってないからな・・・」

「そうか・・・でっとうやって協力するだ？」

「どういうことだ？クロノ？」

「お前に

「リンカーコア」ないのにどうやって協力するだ？」

「まあ、その

「リンカーコア」については知れないが、言ったる魔導師じゃなくて、魔術師だと・・・」

「魔術師！？そんなの知ら・・・まっまさか・・・」

「どうしたの？クロノ君？」

クロノは何かきずいたのか、様子がおかしい、エイミィはそれをきい、士郎が答えた・・・

「きずいたかクロノ・・・そう俺はこの世界の人間じゃあない、並行世界からきた人間だ・・・」

「やはりそうか・・・しかしお前のいた世界に魔法はあつたのか？」

「一応あるな、しかしそれは化学再現できない、もの限定だけで、化学で再現できるのは魔術だな・・・」

「そんなの聞いたことないけど・・・」

「並行世界からね？それならあそこで寝ているのも帰る家がないのも、納得できるわね・・・」

「理解できました？」

「わかったが、朝にフェイトにあったと言ったな。」

「ああ・・・そうだが？」

「何をしていた？」

「軽く模擬戦をしてただけだが？まったく齒ごたえがなかったが・・・」

「あれでも一応AAAランクなんだが・・・お前からは、CとBランクの魔力しかないのにどうやって・・・」

「それはな・・・」

士郎がいかけたその時・・・

「ただいま」

「おかえりフェイトさん！」

「うん」

「おかえり」

「おかえり」

「・・・」

「みんなどうしたの？まさか誰かきて・・・」

「・・・」

「士……郎？」

「なんだ？フェイトそんなに驚いて？」

「林にいたらリンディさんに見つかってな……住んでいる所は？
って聞かれたんでな……」

「でっ……ないって、応えたの？」

「その通りだ！そのおかげでこの家に、いそろろつすることになっ
たんだ……」

「そ、そうなんだ……とりあえず、よろしく……それと……」

「こちらこそよろしく……？それと？」

「ちょっと聞きたいことがあるから、後で私の部屋にきてね……」

「は？まあ、良いけど……」

「それはそうと、さっきの続きだ！」

クロノは話を戻した……フェイトは……？……としていたが、一緒に
椅子に座る……

「聞くけどなぜ、フェイトまで座るんだ？」

「士郎の話が気になるからだよ。」

「まあいいけど・・・」

「いいから話せ！」

「今から、話すって・・・」

士郎とクロノがこのような会話をしている時フェイトは・・・

（士郎の魔力を調べたけど私達とは何かが違うような・・・！リンカーコアがない！なっなんで？まあ後で聞こう・・・）

とっ思っていた・・・

「じゃあ話すぞ」

「いいぞ」

「魔力が弱い俺が、フェイトに勝てた理由はな・・・」

続く

第5話 ようこそ！ハラオウン家へ！Part 3（前書き）

どうもMr・Yです。 たいていは土曜日に更新ですが日曜日
になったり月曜日にもなるかも知れませんが、許してください・・・
では、シロフェイ第5話を楽しんでください！！

第5話 ようこそ！ハラオウン家へ！Part 3

第5話 ようこそ！ハラオウン家へ！Part 3

「俺が簡単にフェイトに勝てた理由はな「投影」を使ったからさ・
」

「「「「投影？」「」「」

4人は初めて聞く単語に疑問をもつが、フェイトはこうたずねた・
・

「何もない所から武器を出したあれのこと？」

「まあそんなかんじのものだ、あの時出した武器は、双剣 干渉・
莫やだ！」

「あの白色の剣と黒色の剣のこと？」

「そうだ・・・？どうしたクロノ？」

あの双剣の名前を言った時クロノは、士郎にたいし何か言いたそう
だったので士郎は尋ねた・・・

「いや・・・他に何が出せるのかな？と思ったただけだ・・・」

「他出せると言ったら、「カラドボルク」、「ゲイボルク」、「ロ
ー・アイアス」などだがまだ他のも出せる。」

それを聞いたとたんクロノは・・・

「それって全部神話に出てくる英雄の武器じゃないか！そんな物を
簡単に出せるのか！」

「まあな・・・おそらく俺だけだろう・・・神話に出てくる武器を
使う人物は・・・」

士郎がそう言うときクロノがこう言った・・・

「まさに「レアスキル」だな・・・」

「レアスキル？」

士郎は、聞き馴れない言葉に疑問を持ったためクロノにきいた・・・

「お前の魔術ようになんかかなり奇妙な能力のことだ！ちなみにレアスキ
ルを持っているといろいろと便利なんだ！」

「だがそれは管理局の局員だけだろ？」

士郎は今一番気になることを聞いた・・・

「そ、そうだが・・・」

「なら、局員以外だったらどうするんだ？脳をホルマリン漬けとかにするのか？」

士郎はこう尋ねるとクロノの代わりにフェイトが答える・・・

「しないと思うけど・・・だいたい管理局は法を守る場所だよ？なんでそんなこと聞くの？」

フェイトの質問に士郎は・・・

「俺がいた世界ではこれが、普通だったんだよ・・・」

士郎がそんなことを言った時・・・

(俺がいた世界？どういうこと?)

「それはそれで本当に協力してくれるんだな？敵のスパイだったなら容赦しないぞ！」

「ああ・・・本当だ！敵とは誰のことだ？」

士郎がクロノの質問に答えるそしたら・・・

「そうか・・・まあ敵はいずれわかる」

そんな話をしていると・・・

「ハ～イ！もうご飯が出来たから、食べましょう！」

「なっ！いついつの間」！

士郎がきずいたときにはもう夕食が出来ていた・・・

それから食べたしてからはしばらくして士郎が尋ねる・・・

「あ～」

「何？士郎君？」

「明日から朝だけですから俺が作ってもいいか？」

「あら助かるわ〜でも出来るの？」

「もちろんだ！」

「わかったわ！じゃあお願いするわね！」

「了解」

こんかんで夕食が終わった・・・

そしてフェイトの部屋・・・

「は〜今日も疲れたな〜」

そんなことをフェイトが呟いてベッドに腰掛けると・・・

コンコン・・・

「ど〜んぞ〜」

「失礼するぞフェイト」

そう言つて士郎は部屋に入る・・・

「士郎・・・来てくれたんだ・・・」

「とりあえず、用事を聞こうか・・・」

士郎がこう言つとフェイトが尋ねた・・・

「とりあえず士郎は何処から来たの？まるで違う世界から来たようなことを言つてたけど・・・」

「ああ、フェイトは知らなかったな・・・まあ俺は並行世界から来たんだ・・・」

「並行世界？そんな所から来たの？」

「ああ・・・ちなみに場所は地球の日本N県冬木市だ・・・」

士郎がそう言つとフェイトは・・・

「ここは、地球の日本〇県 海鳴市だよ・・・」

フェイトがそう言つと・・・

「そうか・・・まだあるか？」

士郎がそう尋ねると・・・

「うん・・・二つ目は今日の朝に話したのはのことなんだけれど・・・」

「なののこと？」

「うん、なのはも明日から私達と特訓したいんだって・・・良いかな？」

「別に良いけど・・・」

「本当！じゃあなのはに連絡入れとくね！」

「これで最後か？」

「士郎は、そう尋ねる・・・」

「いや・・・最後に一つだけ・・・」

「なんだ？」

「フェイトは少し迷ったが士郎に尋ねた・・・」

「ぐいぐいで寝るの？」

「・・・」

「決めてないの？」

「士郎も士郎でこの質問は迷うがすぐにこう言った・・・」

「ソファで寝る・・・」

「そう・・・おやすみ、士郎」

「ああ・・・おやすみ・・・ちなみに明日は4時起きな・・・」

「うん・・・」

そして二人は眠りはじめたが・・・

(あれ？何か聞くのを忘れているような・・・まあ思い出した時でいいか・・・)

と、フェイトは思っていた・・・

第6話 2回目の模擬戦Part1（前書き）

どうもMr・Yです。こうして更新が早くした理由は下書きが早くすんだからだけです・・・読者の人に質問します。最終話がすんだ後に番外編を作る予定ですが、ネタを提供してほしいのです・・・多い内容から2作品だします。たくさんの方の投稿をお待ちしています。ではシロフェイ第6話を楽しんでください！！

第6話 2回目の模擬戦Part1

第6話 2回目の模擬戦Part1

朝3時20分に士郎は起きて朝食の準備をしていた・・・

「まあフエイトが起きてくるまでには、出来るか・・・」

朝食は、鮭の塩焼きを中心の和食だ・・・

そして30分後・・・時効は3時50分・・・

「おはよう〜士郎」

「おはようフエイト、いいから顔洗ってこい・・・」

「うん・・・」

そして・・・

「うわ〜とてもおいしい」

「そう言ってくれるとうれしいな・・・」

「昨日話したこと・・・覚える？今日からなのはが来るんだけど・・・」

「なに、心配ない・・・ちゃんと連絡しているんだろ？」

「そうだけど・・・」

「それはそもあれ速く食べる・・・」

「うん・・・」

そして・・・

「じちそうさま」

「俺はかたずけるが、フェイトは速く着替えてこい・・・」

「うん、終わったらマンションの玄関前に集合ね・・・」

「ああ・・・」

そして・・・

「あつ！士郎！速かったね」

「当たり前だ、2人分のかたづけぐらいすぐに出来る！」

「そうなんだ・・・まずはなのは家の前に行くからね・・・」

「ああ・・・」

二人がそんな会話をしていたら・・・

「フエイトちゃん！！」

「なのは！？速いね！」

「楽しみにしていたら早く起きちゃった・・・」

「あつなのは！この人が・・・」

フエイトが士郎の紹介しようとしたが士郎が答えた・・・

「衛宮士郎だ・・・士郎でかまわない・・・」

「私は、なのは！高町なのは！よろしくね士郎君！」

「ああ・・・よろしくな、なのは！」

「うん、ところで士郎君・・・」

「なんだ？」

突然質問してきたなのはに少し驚く士郎・・・

「どこに住んでるの?」

・
(まずいな・・・フェイトの家とは言えないし・・・よししまかそ
う!)

と士郎は思っていたが・・・

「あ、士郎なら私の家に住んでるんだよ!」

とフェイトが答えた・・・

「ええ、本当!?じゃあご近所さんだね!」

もういい面倒だ・・・

「まあ、いい・・・行くぞ・・・」

そして林前の広場・・・

「さて、今日はなにをする?」

そう聞くとなのはがこう言った・・・

「ハ、イ、模擬戦!」

「な・・・なんでさ・・・」

「私まだ士郎君の実力知らないんだよ」

「別にいいけど・・・ただしフェイトと組め！」

「えっ？なんで？」

「多分一人だとすぐに終わるからだと思うよ・・・」

「うん！いくよ。レイジングハート！」

「バルディッシュュ！！」

「セットアップ！！」

それぞれバリアジャケットに着替え士郎に挑んでいった・・・

「さあこい！二人共！！」

こうして二回目の模擬戦が始まった・・・

続く

第7話 2回目の模擬戦 Part 2 (前書き)

どうも Mr・Y です。次回から少し更新が遅いかもかもしれませんが
楽しみにしててください。
では楽しんでください！

第7話 2回目の模擬戦 Part 2

第7話 2回目の模擬戦 Part 2

(フェイト単体より時間くうなこりゃ・・・)

士郎がそう考えていると・・・

「ハーケン・セイバー!!」

フェイトが魔力刃を打ち出してきた・・・

「く・・・トレース・オン 投影開始」

士郎は何時もどつりに双剣干将・莫やを投影してハーケン・セイバーを受け止めた・・・それを見ていたなのはが・・・

「ふえ！何も無い所から剣が!？」

なのはがそう驚いているなか士郎は・・・

「く、さすがに昨日より良いか・・・」

当たり前だまずフェイトあまり急接近しないようにしている・・・

「デイベイン・・・」

「な、でかい！」

「バスター！！！！！！！！！！」

「ち。I am the bome of my sword」
「ロー・アイアス」
「士郎はなんとかアイアスの盾を投影したのはの
攻撃を防ぐ・・・」

（まあまあの攻撃だがまさか、1枚わるとはな・・・）

「なかなか良いコンビだな、ならこちらも少し本気をだそうか・・・」

「そう士郎が言うと二人は・・・」

「えっ？（まだ本気じゃないの？）」「」

と驚いているが士郎は・・・

（とないえこの体では少々不利だ・・・よし、あれをつかうか）

と考えあるものを投影する

「I am the bone of my sword」
「カラ
ドボルク」

士郎はカラドボルクを投影し、矢へと変えそれを打ち出しなのはと
フェイトの間におとす……

「なっなに？これ……」

「士郎、これ「非殺傷設定」？」

なのはは威力に驚き、フェイトは質問した……

「非殺傷？なんだ？それは？」

案の定士郎は知らなかった

「ねえ、とりあえず中止しよう」

と、フェイトは言った、それを聞いた士郎は……

「そっだな中止しよう……」

「ふえ、ふえええ！？」

なのはは突然なことで驚いたがしょうがない……

「うっなんで？」

なのはは尋ねるそれをフェイトが答える。

「へたしたら私達が死ぬかもしれないからだよ、なのは」

「なっなんで？」

なのはがそう言つとフェイトが・・・

「そういえばなのはは、士郎の魔術について知らなかったね」

「魔術？魔法じゃなくて？」

なのはがそう言つと・・・

「士郎のいた世界では化学で再現出来る物を魔術で出来ないものを魔法なんだって・・・」

フェイトがそう言つがなのはは・・・

「いた世界？魔術？」

と言つてわかつてないようだ・・・

「つまり俺は異世界人で魔術師なんだ」

士郎が言つと・・・

「なっなんでここに？」

となのはが尋ねる。

「ランダムに跳んだからな……」

と、士郎は答える。

「一つ聞いていい？」

そうフェイトが尋ねて来る。

「なんだ？フェイト、昨夜聞いたのにまだあるのか？」

士郎がそう聞くと、

「いや、忘れてただけなんだけど……士郎って、魔力はあるのに「リンカーコア」ないんだけど、でも代わりになにかがあるように感じるんだけど……」

フェイトがそう聞くとなのはは、

「えっ？そうなの？私は何も感じないけど……」

なのはがそう言うのが士郎は軽く無視して士郎が答える……

「そのこか……理由はな魔術回路がリンカーコアの代わりに入っているからさ」

「魔術回路？」

フェイトとなのはは、聞いたことない単語に????といった表情を

見せる・・・

「魔術を使うのに必要なものだ、まっ刀の刃みたいなものだ！」

士郎が言いお笑いと、

「わかったけどどうするの？そのままだと人を殺しちゃうよ？」

フェイトがそう言つと士郎は、

「うーん、刃は漬すことは出来るんだけど、もう一つのほうはそうにはできないだ」

そう士郎がいうとフェイトが、

「もう一つの能力？」

と、尋ねるが・・・

「いずれ解るぞ」

と士郎が答えた・・・

「でもどうするの？」

となのはが言つとフェイトが・・・

「エイミィに頼んでみる？デバイスは作れるけど・・・」

そうフェイトが言うと士郎は・・・

「そうだな・・・」

と言って立ち上がり

「いくぞ、今日は解散だ・・・」

と言ってアパートに向かった・・・

続く

第8話 聖祥の試験に挑戦（前書き）

どうもMr・Yです。 テスト週間に入ってしまった・・・
だるいです。さて、番外編についてなんです、適当に書くことに
しました、1話だけだと、思われますが、待ってください。

では、第8話をどうぞ！

第8話 聖祥の試験に挑戦

第8話 聖祥の試験に挑戦

「という理由で、出来る？」

アパートに着いたとたんエイミイを見つけたので尋ねる土郎・・・

「能力だけを非殺傷設定にするものか・・・出来るよ作ってあげる
！」

「ありがたい・・・」

「じゃあ私は学校があるから、行ってきます！」

「いつてらっしやい」

そして・・・

「ねえ土郎君」

「なんですか？リンディさん」リンディに声をかけられたので反応する・・・

「貴方も学校に行ってみない？」

「なぜです？べつにいいですよ」

「あらうでもね、それだと少し迷惑かな？」

「なぜです？」

士郎が聞くとリンディは

「この世界で9歳の少年を学校に通わせないなんて、周りかわ見れば酷い家だと思われちゃうのよ」

「ぐ……わかりました」

「じゃあ、今日の午後、「聖祥」に行きましょう」

「一つ聞いてもいいですか？」

「なに？」

「私立ですか公立ですか？」

「私立よ」

士郎の質問に即答で答えるリンディ・・・

「・・・ちっ・・・」

「なんで、舌打ちするのかな？」

「べつに・・・」

「いいから行きましょー！」

「な・・・なんでさ」

そして午後聖祥小学校・・・

「じゃ、テストを始めます。三年のでいいのね」

「ああ・・・（なんだか、すごく早く終わりそうだが・・・）

「じゃあ、始め！」

「ふん」

そして50分後・・・

「はい終了！結果が出たら家に連絡します、お疲れ様でした」

「ありがとうございますでしたそれでは失礼します。」

士郎が会場から出るとそこにはリンディがいた

「あら、もう終わり？」

「はいなんとかかなると思います。」

「それじゃあ、家に帰りましょうか！」

そして自宅・・・

「「ただいま」」

「あつ士郎君例のあれ、来週には出来るよ」

「ありがとうございます」

「さて今日は士郎君がどこで寝るかどうかなんだけど・・・」

リンディがそういつと士郎は、

「あっ！ソファでいいですよ、そのほうが寝やすいので」

士郎がいつとリンディが反発した

「こればかりは、ゆずれません」

「しょうがないわね」いで寝なさい」

「はい」

そして夕方・・・

「ただいま」

「おかえり」

「今日の夕食なに？」

「士郎君に聞いてみたら？」

「士郎、今日の夕食なに？」

とフェイトが尋ねると

「今日はトンカツだ」

そして夕食・・・

「」「」「いただきます」「」「」

「そういえば士郎君」

「なんですか？」

「今日フェイトちゃんが通っている学校の転入試験を受けたんだよね」

「そうなの？士郎」

「まあな・・・まあ、テストは楽だったけど・・・」

「そうか、ところで士郎」

「なんだ？クロノ？」

士郎はクロノに聞く

「敵についてだが、敵はヴォルケンリッターだ」

「ヴォルケンリッター？」

士郎は全く知らないので聞く・・・

「ベルカの騎士の集まりで数は4人だ」

「そうか・・・ところでベルカって？」

「昔、ミッド式と戦った魔法だ、士郎の投影はこれに似ている」

「そうなのか」

そんな会話をしつつ夕食は終わり、フェイトが

「士郎、ちょっと私の部屋に来てくれないかな・・・」

と、尋ねてきた・・・

続く

第9話 いざ、学校へParty(前書き)

どうもMr・Yです。

テストもだるいです。

テストなんて無ければいいのに・・・

では楽しんでください！

第9話 いざ、学校へPart 1

第9話 いざ、学校へPart 1

「 土郎ちょっと私の部屋に来てくれないかな・・・」

「 フェイト？わかった」

「 フェイトの部屋」

「 なんの用事だ？フェイト」

「 ちょっと聞きたいことだよ」

「 聞きたいこと？」

フェイトの質問に少々驚く土郎、

「 土郎は、なんでこの世界に来たの？なぜ？そうだったの？」

そう聞くが、土郎が少し冷たく答える

「 それは、答えられない」

そういうとフェイトは、

「なんで？私は、土郎のことを大切に思っているんだよ、家族なんだよ！だから……」

フェイトの目には涙が浮き出る、それをみた土郎は……

「わかった……時がきたら話すそれでいいか？」

「うん、じゃあおやすみ土郎」

「ああ……おやすみフェイト」

そして土郎はフェイトの部屋をでた。

（廊下）

「土郎君、さっき電話があって合格だって」

「早いですね……」

そう土郎が言うがリンディは軽く無視して……

「じゃあはい制服」

「無視ですか！ていつかなんであるんですか？しかも明日さらかよ！」

そう聞かすがリンディは前半は無視し後の二つは答えた

「うん、ちなみにクラスはフェイトさんやなのはさんと同じクラスだから」

それを聞き土郎は諦めたように……

「な、なんでさ……」

とリンディに尋ねた……するとリンディが答えた

「うちが特種だから、同じクラスにしてもらったの」

「そうですか、ではおやすみなさい」

「おやすみ」

そして眠り始めた……

そして、朝、3時40分……

士郎は聖祥の制服を着て朝食と昼の弁当の準備をしていた……

「さて弁当は済んだな……朝食は、よし味噌汁と鮭の塩焼きだな」

と、いい鮭を焼き始めると……

「おはよう〜士郎」

フエイトが起きてきたので

「おはようフエイト、今日は、早いな」

「士郎の手伝いをしようと思って」

そして士郎は

「ありがとう、じゃあ味噌汁を作ってくれ」

「うん、あっもう制服着てるんだ〜どこのクラス？」
フェイトの質問に士郎は・・・

「フェイトと同じだ」

と答える、それを聞きフェイトは・・・

「ぶ〜んって、ええええ！」

という反応をした、それをみた士郎は、

「驚いてないでとっとと作って、食べるぞ」

と、フェイトに言いつつ、

「うん、じゃあ早く作って食べよう」

とフェイトがいい、作業を始めた・・・

そして40分後 林前・・・

「じゃあ今日も一日頑張るぞ〜」

「朝から、ハイテンションだな」

なんかテンションの高いフェイトに少し驚く士郎

「そうだねー私はまだ少しねむいよ」

まだねむいと述べるのは・・・

「よし、今日は俺の攻撃を全て回避するか防ぎきること」

「「えっ？」」

士郎が言う訓練に少し嫌そう顔をする2人に・・・

「大丈夫だ刃は潰してある」

と、士郎が言うが・・・

「「無理!!」」

と、二人組言うが士郎は無視し技を放つ・・・

「いくぞ・・・」「ソードバレルフルオープン」

（50分後）

「ふえ〜」

「な、なんとか出来た・・・」

二人は疲れきって座り込むが士郎は・・・

「まだ、四割だぞ・・・」

それを聞き二人は

「ええええ!!!」

と驚いたが士郎はこう言った・・・

「しかしま、お前達にしてはいい動きだ」

と二人を褒め、それを聞き二人は、士郎に尋ねる

「えっ？じゃあ」

「そう今日は解散」

と士郎が言つと・・・

「はい」といい、二人は立ち上がり歩きだした・・・

くバス停く

「しかし驚いたよ・・・士郎君が私達の学校に転入して、私達と同じクラスなんて」

「まあ、よろしく」

「アリサとすずかによろしくと言っとくね」

初耳だから確認しようと二人に聞く士郎・・・

「一つ聞くがその二人は魔法を知ってるか？」

その質問に即答するのは・・・

「知らないよ」

「そうか、ならば魔術も知らないな」

「当たり前・・・あ、バスきたよ」

「そうだな・・・」

そして、バスに乗り運転手に挨拶をすると・・・

「フェイター！」

「なのはちゃん！！」

という声が聞こえた・・・

続
く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8967g/>

シロフェイ

2010年10月15日18時23分発行